

# 日本語：通言語的研究から見た日本語の「ナル」

守屋三千代

## 1. はじめに：これまでの経緯と疑問のありか（→要旨参照）

ナル的表現研究会ではユーラシアの言語において日本語のナルのように「出来」を専用に表す動詞をナル相当動詞、これを伴う表現をナル的表現、こうした動詞・表現を持つ言語をナル的言語とし、通言語的にナル・ナル相当動詞の意味用法を調査した。その結果、日本語には主格を伴う出来（例：実がナル）と、認知的時間幅に基づき与格を伴う結果の出来（変化）（例：氷が水にナル）があり、後者を主たる用法とするのに対し、ナル的言語の多くは主格／ゼロ格を伴う出来を主とすることが明らかになった。ここで新事態の出来を表す創世記の「光、あれ。そして光があつた」の箇所を言語別に調査したところ、原文のヘブライ語は存在と出来/生成を意味する *hyh*（後述）を用い、多くのナル的言語は出来・生成を表すナル相当動詞を用いるのに対し、日本語・朝鮮語・中国語・英語などは存在動詞を用いることがわかった。それはなぜか。この疑問をめぐり、以下の観点から考察する。

## 本発表の構成

1. はじめに：これまでの経緯と疑問のありか（上記）
2. ヘブライ語聖書創世記冒頭「光あれ」の原文と動詞 *hyh* の意味、および各国語訳
3. 日本語動詞ナルの表す出来の意味とその特徴：通時的・通言語的観点より  
　　—なぜ「光なれ」と言えないのか—
4. 日本語動詞アルの表す出来の意味とその特徴：通時的・通言語的観点より  
　　—なぜ「光あれ」が可能なのか—
5. 創世記冒頭 “*Yehi or.*” はなぜ日本語では「光、あれ」と訳されるのか
6. おわりに：まとめと今後の課題

## 主要参考文献

## 2. ヘブライ語聖書\*創世記冒頭「光あれ」の原文と各国語訳

### 2.1 ヘブライ語聖書の成立

(1). 「旧約聖書はキリスト教における名称であり、本来はユダヤ教の聖書である。ユダヤ教ではタナハあるいはミクラーと呼ばれる。ユダヤ教とキリスト教で名称が異なることから、近年、第三の名称として「ヘブライ語聖書」（Hebrew Bible）が使われるようになっている。ただしアラム語の部分もわずかにあるので、厳密な名称というわけではない」  
(越後屋 2025)

(2). ヘブライ語聖書の成立（発見）年代：伝承上は紀元前 12～5 世紀にかけて徐々に成立。文書学的に最も古い断片は、死海写本（Dead Sea Scrolls, 紀元前 3 世紀～1 世紀）である。標準本文は 1.マソラ本文（Masoretic Text, 紀元 7～10 世紀）とする。

### 2.2 「光」の指す聖書的な意味

(1). 神は二つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせられた。神は（中略）光と闇を分けさせられた。神はこれを見て、良しとされた。夕

べがあり朝があった。第四の日である。」(ミルトス)

- (2). (光とは)〈旧約聖書〉においては、創造のわざによって存在するようになった地上の昼の光のこと。太陽はこの光に従属しており、このことは旧約の象徴言語にも影響を及ぼしている。」(聖書大事典編集委員会編 1989『聖書大事典』教文館)
- (3). 光という思想は、聖書の啓示全体にわたってみられる。光も他のすべてのものと同様、神から造られたものにすぎない。(X. レオン・デュフル編集委員長・Z. イエール翻訳監修 1999『聖書思想事典 新版』三省堂)

## 2.3 創世記冒頭の原文と逐語訳

### 2.3.1 創世記 1:3 (\* היה : hāyāh の意味は 2.4 を参照)

וַיֹּאמֶר יְהוָה אֱלֹהִים אָורֶת בְּהִיא וְלֹא־יְהִי אָור

vayyōmer 'ělōhîm yehî 'ôr va yehi 'ôr  
言われた 神は あれ 光 すると あった 光

・あれ：語根 היה [hyh:haya] : יְהִי [yehî] : [jussive/imperative,3MSG]

・すると(光が)あった：וְלֹא־יְהִי : [va yehi] : [PFV,3MSG]

### 2.3.2 yehi : jussive について

#### (1). יהי (yehî) は Qal jussive 3rd person masculine singular

語根 היה (hāyāh)

完了形 (3ms) היה (hāyāh)

未完了形 (3ms) יִהְיֶה (yihyeh)

祈願法 (jussive) יְהִי (yehî)

#### (2). יהי (yehî) は未完了形 יִהְיֶה (yihyeh) の短縮 (母音縮約) 形

古典ヘブライ語では未完了形から祈願法:jussive\*(アラビア語文法由来)を作る。

#### (3). jussive(祈願法) : 間接的命令 used to describe the form of verb that is used for giving an order; especially one that expresses a wish: (Cambridge Dictionary, online)

### 2.3.3 vayehi or について : waw 連接未完了形による物語文の標準過去形

(1). 創世記 1:3 には Yehi or,vayehi or と二つの yehi が現れる。前者は未完了形の jussive であり、後者は未完了形で waw/va を伴う物語的完了の形式を取る過去叙述形である。

(2). ヘブライ語には完了・未完了があり(過去時制はない)、これに先行する接続を表す waw/va とともに物語文の標準過去形を作る。ヘブライ語では waw/va が多用される。

(3). The Perfect with Wāw Consecutive : Waw/wa/va : WAW 接続を伴う完了表現

Gesenius (1910 版) §111–§112

・「(waw) + 未完了形 (wayyiqtol)」=物語的完了 (narrative past) を表す。創世記 1:3 「וְיִהְיֶה אָור」はその代表例とする。Heinrich Friedrich Wilhelm Gesenius, *Hebrew Grammar* (ed. Kautzsch & Cowley, 1910) §112. *The Perfect with Wāw Consecutive*

[和訳] (a) 未完了形に接続詞 wāw が先に立ち、過去の出来事の叙述を継続する働きをする。(b) wāw 連接未完了形 (wayyiqtol) はヘブライ語散文における通常の叙述形式であり、過去の一連の行為を順に記述するために用いられる。

### 2.3.4 G-stem・カール態・パアル態

セム語の動詞には「語幹 (stem)」の体系があり、以下のように分類される。

名称	機能	対応するヘブライ語語幹
G Grundstamm (基本語幹)	自動詞・単純動詞	Qal (קָל) *カール態=パアル態
D Doubled stem	強意・反復	Piel (פִּיאֵל)
N N-stem	受動・中動	Nifal (נְפָעֵל) *創世記冒頭に現れない
H Causative	使役	Hifil (הַפְּעִיל)

[be.IMP.3MSG]の G は「基本語幹 (Qal)」を表す。Qal (קָל)は英語圏での名称。パアル態 (לְעֹלָה) はヘブライ語文法の伝統名。基本語幹として「単純・自動的な動作」を表す。

## 2.4 動詞 *hyh*(הִיחָה: *hāyâ*) の意味的特徴：生成/出来と存在の両義性（→翻訳の主眼）

### 2.4.1 *הִיחָה* (*hāyâ*) の辞書的意味：(*hāyâ* の両義性：to be/exist・to happen/come to be)

- *הִיחָה* (*hāyâ*) は「存在する」「～になる」「起こる」を基本的に意味する。
- *הִיחָה hāyâ*：“to be, to become, to happen, to occur, to take place, to come into existence”と定義し、1.存在(“be, exist”)、2.生成・変化(“become, come into being”)、3.出来事の発生(“happen, occur, come to pass”)とする。出典：HALOT (Koehler & Baumgartner, *The Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament*, Vol.1, Leiden: Brill, 1994–2000)

参考:DCH (Clines, *Dictionary of Classical Hebrew*, vol. 2, 1995–2011)

### 2.4.2 参考：ヘブライの思想と *hyh*について

(1). Thorleif Boman : 三瓶 2025 は「ヘブライ人の思惟と言語をギリシャ的思惟との比較から浮き彫りにした Boman(1954)によれば、ヘブライ語のハーヤー動詞には「存在(Sein「アル」)、生成(Werden「ナル」)と活動(Wirken)の三つの主要な意味がある。日本語や英語の聖書ではハーヤー動詞は静的な「存在(アル、be)」で訳されているのに対し、ラテン語聖書(Vulgata)やドイツ語聖書では、動的な「生成(ナル)」が選ばれている。」 pp.291-292

Thorleif Boman : Das Hebraische Denken im Vergleich mit dem Griechischen 1956: トーレイフ・ボーマン\*1957 植田重雄訳『ヘブライ人とギリシア人の思惟』新教出版社 : 1894-1978

- ヘブライ人の動的な考え方はヘブライ語動詞にあらわれており、その動詞の根本の意味はつねに運動と活動を示している。p.36
- ハーヤー動詞には生成(werden)と存在(sein)と活動(Wirken)の三つの主要な意味があり、しかもそれぞれこの三つが内面的に連関し合って統一を形成していることを、彼 (Ratschow Werden und Wirken 『生成と活動』) は見出したのである。p.56

(2). 有賀鐵太郎 : 有賀鐵太郎博士遺著作集刊行会 (1981)『有賀鐵太郎著作集IV』創文社

- ヘブライ的思考法を私はハヤトロギアと名づけているが、それはすなわち「ハーヤー」のロゴス(理)との意である。これに対しギリシア的思考法はオントロギアである。P. 185
- ヘブライ語では「成る」とか「生起する」を離れた「有る」は考えられていない。生成・生起したものは「有るもの」にちがいないが、それは前者を捨象した「有る」ことではない。p. 188
- ヘブライ語における *hayah* は「成る」「起こる」「はたらく」のすべてを包括する「ある」であって、そこでは「生成」から区別された「ある」は考えられない。P. 448

## 2.5 和訳の実際

## 2.5.1 動詞 *hyh* はいかに和訳されているか (守屋 2025a)

	(光あれ→光があった)	出典：刊行年・訳者
1	神は「光 <u>あれ</u> 」と言われた。 すると光 <u>が</u> <u>あ</u> <u>つ</u> た。	1955 日本聖書協会編『小型聖書(口語)』日本聖書協会
2	神は「光 <u>あれ</u> 」と言われた。 すると光 <u>が</u> <u>あ</u> <u>つ</u> た。	1975 尾山令仁『創世記』羊群社
3	神は言った。「光 <u>あれ</u> 」。 すると光 <u>が</u> <u>あ</u> <u>つ</u> た。	1997 月本昭男『旧約聖書 I 創世記』岩波書店
4	神は言われた。「光 <u>あれ</u> 。」 こうして、光 <u>が</u> <u>あ</u> <u>つ</u> た。	1987 共同訳聖書実行委員会『聖書新共同訳一旧約聖書』日本聖書協会
5	神は言われた。光 <u>あれ</u> ！ こうして光 <u>が</u> <u>あ</u> <u>つ</u> た。	2008 日本聖書協会翻訳部・あづみ棕『創世(ジェネシス)一光を受けし者たち』日本聖書協会 日本聖書協会翻訳部
6	神光 <u>あれ</u> と言ひたまひければ 光 <u>ありき</u> 。	2015 翻訳委員会訳『文語訳旧約聖書 I 立法』岩波書店
7	神が、「光 <u>あれよ</u> 」と言われると、 光 <u>が</u> <u>出</u> <u>來</u> た。(1956 関根)	1956 関根正雄訳『旧約聖書 創世記』岩波文庫
8	神が一声、「光は、 <u>出</u> <u>來</u> い」と 仰せられると、光 <u>が</u> <u>出</u> <u>來</u> た。	2004 尾山令仁訳『聖書 現代訳』現代訳聖書刊行会
9	創造主が一声、「光は、 <u>出</u> <u>來</u> い」 と仰せられると、光 <u>が</u> <u>出</u> <u>來</u> た。	2013 尾山令仁訳『創造主訳聖書【旧新訳聖書】』 創造主訳聖書刊行会

## 2.5.2 和訳から見えること

- (1). 「あれ→(すると／こうして) あった」と存在動詞アルを用いることを基本的翻訳例としており、ナルは現れない。例外的に「出来る」および「出て来る」が見られる。
- (2). *va*の訳として「すると／～と」と「こうして」がある。「すると／～と」は後件に意外性や驚きを与える事態の出来を表現し、「こうして」は後件を必然的な結果として、「光あれ」という宣言的命令に発する存在の発現を一まとまりの出来として表現する。
- (3). この「光」の出来・存在に対し、日本の神話では「光」をはじめ科学的・物理的な存在の出来を表す場面は見られない。

## 2.6 創世記冒頭の他言語訳の実際：存在動詞／出来動詞はいかに現れているか

2, 3, 6, 8 は栗林 2025・宮岸 2025・徐 2025・三瓶 2025(守屋・池上 2025 に所収)を参照

[言語名]	「光、あれ」命令宣言	→帰結の存在.	[動詞と意味]・存在
1. ヘブライ語 VSO	Yehî 'ôr jussive : 間接的命令	vayehi 'ôr 」: va/waw+未完了形 : 物語的完了(narrative past=過去叙述)	hyh:出来・存在 」(yesh) : 存在詞.動詞ではなく、命令形はなし

2. トルコ語 SOV	Işık olsun. [光] 三人称命令	ve ışık oldu. 接続詞 [光] 過去	<i>ol</i> : 出来→存在
		帰結で、存在動詞varは使われない	<i>var</i> :存在動詞
3. シンハラ語 SOV	eļiyə wee-waa [光] 願望形	e-wiṭə eļiyə wiyə. その-時 [光] 過去形	<i>wenəwā</i> :生成・存在
			<i>innəwā</i> :有生存在 <i>tiyenəwā</i> :無生存在, 文語の場合は <i>wenəwā</i>
4.朝鮮語 SOV	Bich-i isseura. [光-主格]命令：存在	Bich-iisseotda. [光-主格] 存在：過去形	<i>itda</i> : 存在
	Bich-i saenggeora [光-主格] 命令*	Bich-i saenggyeotda [光-主格] 生成：過去形	<i>saenggida</i> : 生成・出来
	doeda 命令不適切*	doeda 帰結不適切*	<i>doeda</i> : 出来・変化
5.日本語 SOV	光 あれ。	すると/こうして光が あった。	アル:存在・出来の意を 含む
	[生じよ]可	[生じた]可:ただし永続 的な存在を保証しない	生じる:出来
	[ナレ]不適切*	[ナッタ]不適切*	ナル:出来・変化
6.中国語 SVO	要 有 光。 祈願の宣言	就 有了 光。 接続語 (存現文)	有:存在(出来)*
	在の命令は不可	在了光は不可	在:静的所在
7.英語 SVO	Let there be light. *宣言的命令	And there was light.	<i>be</i> : 存在 (<出来) *出来動詞なし
8.ドイツ語 SVO	Es werde Licht. 接続法I非人称構文	Und es ward Licht. 古形の過去(現:wurde)	<i>werden</i> : 出来
	存在:sein 命令不適	*存在:不適	<i>sein</i> : 存在

### メモ：動詞 hyh の各言語の訳について

#### (2). トルコ語：出来動詞：*ol*

①ナル相当動詞 *ol* を命令文、帰結において用いる。②三人称命令形を有する。③接続語 *ve* を用いる。④存在動詞 *var* は命令・帰結文に現れない。

#### (3). シンハラ語：出来動詞：*wenawa*

①ナル相当動詞 *wenawa* を命令文、帰結において用いる。②三人称命令形有り。③接続語を用いない傾向有り ④*wenawa* には出来と存在の両義性が見られる。

#### (4). 朝鮮語：出来動詞 *doeda*, 存在動詞 *itta*, 生成動詞 *saenggida*

①典型的な出来動詞 *doeda* はナルのように変化や成就を表し、他のモノからの変化を含意することから、無からの出来を表す *hyh* の訳には用いられない。②正式教会訳(プロテ

スタント) Revised Korean Version, 1998 では存在動詞 *idta* が用いられている。③近年、カトリック・エキュメニカル系(Common Transaltion 1977)の New Translation 2004、Modern Korean Bible、Standard New Korean Bible 2011 などは生成の意味の Saenggida(生成する・生じる)を用いられているという。

(5). 日本語：存在動詞アル（詳細は4.）

(6). 中国語：存在動詞「有」

①中国語訳の「要有光」は形式的には「命令形」というより「要」を用いた指令的表現・使役的意志文。②「要在光」はない。③結果を表す「有了光」は存現文。「在了光」はない。⑤存在動詞「有」は出来、「在」は所在。⑥『中日辞典』2016 第3版：北京・商務印書館、小学館共同編集。小学館：「有」の項4に(ある事態や状態の発生・出現を表す)発生する。生じる：が挙げられている。

- ・加藤常賢：1970『漢字の起源』角川書店：「有」：「有り」と言うことばは、通常の場合にはなくて、突然に出現したという意味である。p.54
- ・藤堂明保 1965『漢字語源辞典』學光社：「尤・疣・有2：起こる・生じる」の項：そこで有無の有とは、人々の思いがけぬことが、忽然として起こる（生じる）というのが本義であろう。PP. 146-147

(7). 英語：存在動詞 *be*

①欽定聖書 The Authorizes Version[1611] The King James Bible ②動詞 *be* はサンスクリット *भु* (*bhū*) (*bheu-, bhu*: 成る・存在する) を源流とする。: Carl Darling Buck 1949 *A Dictionary of Selected Synonyms in The Principal Indo-European Languages* The University of Chicago Press, Chicago & London 9.91 Be:2, IE (Indo-European) \**bheu-*, \**bhu*, primarily 'come into being...' p.635-636 ③英訳の歴史: Wycliffe (1382): *Be made light; and made is light.* → Tyndale (1530s) : *Let there be light, and there was light.* → KJV (1611) : *Let there be light: and there was light.* ④Let there be の構文：橋本功 1995 jussive は強い命令・祈願の意味・欽定訳聖書にこの種の文が現れるのは、話し手の意志を表現するためのヘブライ語法とその翻訳の仕方に起因する。p.129

(8). ドイツ語訳：出来動詞：*werden*

①ルター訳旧約聖書 (Lutherbibel) : 1534年完成。(新約聖書は1522年) Martin Lutherによるヘブライ語および古典ギリシア語からのドイツ語訳。②*Es werde Licht!* は *werden*と非人称〈化〉構文というドイツ語の典型的な二つの「ナル的表現」が「協働」して「ナレ(命令・希求)」を強めたのである。」(三瓶 2025)

### 3. 日本語動詞ナルの表す出来の意味とその特徴：なぜ「光なれ」と言えないのか

#### ・通時的・通言語的観点より

##### 3.1 ナルの基本的意味 (守屋 2025b)

ナルは存在やコピュラへの意味的拡張がない。この点で他のどのナル的動詞よりもいわば「純度の高い」出来動詞だと言える。ただし、その「純度」は極めて制限的な条件に基づく。ナルは意味の抽象化を避け、「主格+ナル」(BCCWJ の検索結果数 383: 典型例: 実がナル)の形式で自然の力に基づく結実や人為による成就を出来として自然発生的に表現したり、「与格+ナル」(同ヒット数 224, 587: 典型例: 春にナル, 氷が水にナル)の形式で変

化の帰結を自然発的に表現したりする特徴を備え、後者を主とする。こうした特徴が、ナルが典型的な出来動詞でありながら、神の宣言的命令「光、あれ」に伴う新事態「光」の出来の表現、およびその帰結の表現にそぐわない原因となっていると考えられる。

### 3.2 辞書の意味

- ・広辞苑（第七版）：【生る・成る・為る】現象や物事が自然に変化していき、そのものの完成された姿をあらわす。**①**なかつたものが新たに形ができる現れる。
- ・日本語文法大辞典：【成る・生る】**意味**生まれる、生まれ出る意は、実がなる、実を結ぶと同様に、この語の原義と考えてさしつかえがないだろう。～生まれることを「ある」とも言い、「生まれる」とも言うので、「なる」の語義はあるものから次のものへと状態が変化することを表現する語として使われるようになつたと見られる。従つて、「成る」の本義を表す字として「成」又は「為」を当てる。
- ・岩波古語辞典：なり：【成り・為り・生り】《植物の実が「なる」ように時が自然に経過してゆくうちに、いつの間にか、状態・事態が推移して、ある別の状態、事態が現れ出る意》**①**何もなかつたところに、自然に何かが形をなして現れる。生まれ出る。実る。**②**ある状態が自然に変化していき別の状態になる。**③**ものごとが成長発展して、そのものとして完成された形に至る。仕上がる。成就する。

### 3.3 制限的な出来の意味 1. 結実と成就（守屋 2025c）

BCCWJ(中納言)の検索結果を見ると、「がナル」は 383（「鳴る」および「我慢・信用・油断がナラナイなどの例を除く）で、これは「にナル」のヒット数 224,587 に比して極めて少ない。「がナル」に前接する名詞には「実」以外に、「モノ：社屋・大著…、コト：成果・和議・契約・復興・天下統一・政権交代・プロジェクト…」など、モノとコトの場合が見られる。植物に内在する生命力の発現としての結実や、人の意志や意図を動因として実現を目指して得た成果などを自然発的に表す。後者のナルの意味は「為」、すなわち行為の結果の完成であり、広義の「結実」（『大辞泉』小学館）や成就を意味すると考えられる。

#### 3.3.1 モノの出来：結実・大著・建造物

ナルの新事物の出来に相当する典型例は『古事記』、『日本書記』『萬葉集』、および祝詞などに見られ、多くは神々の誕生や植物の結実を表す。

- ・現代語訳：左の御目をお洗いになった時に出現なさった神の名は、天照大御神。次に右の御目をお洗いになった時に出現なさった神の名は、月読命。p.267, 訓讀：是に左の御目を洗ひたまふ時に成りませる神の名は、天照大御神。次に右の御目を洗ひたまふ時に成りませる神の名は、月讀命。p.36, 原文：於是洗左御目時所成神名天照大御神次洗右御目時。所成神月讀尊。p.469
- ・我が宿の花橘のいつしかも玉に貫くべくその実なりなむ（大伴家持 萬葉集 1478）
- ・皆花よりぞ木實とは生る。（六根清淨太祓）
- ・七百二十（養老四）年には『日本書紀』がなり、権力者たちの記録の整序も進められた。（仲尾宏「京都の渡来文化」）

#### 3.3.2 コトの出来：成就の例：

- ・～両国は激しく戦ったが、勝敗の決しないまま和議がなり、人質の交換をしている。（井

上秀雄「歴史古代朝鮮」)

- ・長曾我部元親が降伏して、四国平定が成った。(コーパス：森本繁「歴史真説・太閤記」)
- ・1603年に天下統一がナッタ。
- ・七百二十(養老四)年に『日本書紀』がなる。

上例のうち、はじめの3例のコトの成就のナルをアルに変えると、和議がナッタ→アッタ・四国平定がナッタ→アッタ・1603年に天下統一がナッタ→アッタとなり、この場合のアルはナルのように時間幅のある出来を意味せず、点的に動的事態の存在を表す。これがコトの記録的な存在の用法に繋がると考えられる。このようなアルの用法はコトの成就の場合に限り、モノの結実や成就の場合には、アルは存在・所在を表し、出来を意味しない。

### 3.4 制限的な出来の意味2. 帰結の出来(変化)表現への傾斜\*

ナルの用法には起点から着点に至る時間軸上の出来という特徴が見られる。すなわち、ナルには話者が想定する起点から着点に至る時間軸という線上の変化の結果の出来表現があり、これらは主格ではなく着点を表す「に／と」を伴う。例えば、格助詞「と」を伴う「塵も積もれば山とナル」のような例は、「と」により新たな価値づけがされて新事物の出来に近い意味を表し、また着点を与格「に」で表すものでも「信号が赤にナル」のように異なる事態の転換を表す場合も出来に近い意味を表すが、他の多くのナル表現(氷が水にナル・花が実にナル・子どもが大人にナル・彼は医師にナル・病気にナル・(普通の事故が)大惨事にナル)と同様、基本的に同一のモノやコトの部分や状態の変化を表し、時間軸に沿った漸次的な変化結果の出来を表す。形容詞+ナルの変化の用法は出来の意味との連続性はさらに薄い。こうした想定された時間軸上の自然的な出来／変化に傾斜した表現も、創世記の神の言葉に伴う新事態の出来のダイナミズムにはそぐわないことが考えられる。

## 4. 日本語動詞アルの表す出来の意味とその特徴：なぜ「光あれ」が可能なのか

### ・通時的・通言語的観点より

#### 4.1 アルの基本的な意味

現代日本語のアルは典型的な存在動詞として知られる。古典語においては存在を表す「有/在(ア)リ：ラ变」と出来を表す「生(ア)ル：ラ行下二段」があり、前者は中世以降に終止形が「アル」となり、四段と同じ「アル」になった。ここにおいて存在動詞と出来・発生の動詞はともに「アル」となった。アルはナルのような結実や変化結果の出来の用法はないが、古来神や貴人の誕生(御子アレマス)やコトの発生(いったんことアレバ)を表す。近代以降は現前のコトの出来(例:大きな物音を聞いて→何がアッタ?)の意味用法が見られ、ナルとの共通点と相違点がさらに観察される。アルをめぐる先行研究は多数見られる。存在動詞としてのアルを対象とし、「アル(有ル)・イル・ヲル」との相違や補助動詞用法の通時的研究などに大きな成果が見られるが、管見の限りでは生成・出来を表す「アル(生ル)」として研究するものは少ない。ただし、「一がアル」の単位で出来を捉えた優れた論文も見られる(久保田一充 2017)が、その多くは場所格「で」もこの文型において捉えられ、「で」を動的動詞アルに支配された格助詞とは捉えられていないようである。本研究はアルがナルと並んで古来誕生や動的事態の存在や出来の意味を有してきたこと、さらにアルが動的事態の過去・未来における存在(運動会がアル・事故がアッタ)とともに、現前

の突発的な事態の出来（何がアッタ？）へと連続すること、他言語でも出来に存在動詞が用いられること（後述）に着目して、動詞アルに出来の用法を積極的に認め、それが「光あれ」という宣言的命令の表現に繋がる可能性を念頭に置いて論を進めたい。

なお、アルは補助動詞として格助詞「に」とともに「に-アリ→ナリ」や、助動詞「だ」の連用形「で」とともに「デアル」を作るなど、存在に基づくコピュラの用法を持つ。これはもはや動詞アルというよりも「ナリ・デアル」とともに助動詞として理解されよう。こうした意味的抽象化や拡張はナルには見られない。本発表では、存在動詞アルの存在・出来の基本的な意味に着目することとし、以下、本動詞としての用法を対象に考察する。

#### 4.1.1 辞書的意味

- ・**広辞苑第七版**：【有る・在る】『自五』ものごとの存在が認識される。もともとは人・動物も含めて存在を表したが、現代語では、動きを意識しないものの存在に用い、動きを意識しての「いる」と使いわける。①そこに存在する。②この世に存在する。③住む・暮らす。（中略）⑥実際に起こる。徒然草「一・るにも過ぎて人はものを言ひなすに」。「二度一・ることは三度ある」「閏年は四年に一度一・る。」⑦（…を）持っている。他
- ・**広辞苑第七版**：【生る】『自下二』（神聖なもの出現に使われる）この世に出現する。現れる。転じて生まれる。「その御子は一・れましつ」
- ・**日本語文法大辞典**：ある：意味単独用法としての用法は、その事物の存在・状態を表し、まそこから存在を肯定する判断などを表す。～広く物事が存在するという状態の意味を表すのが基本であるが、「である」の形式では助動詞しとして、判断を表すと見られる。（以下、「てある」の形式での補助動詞、「連用形+あり」「てあり」「にあり」「音あり」「き+あり」から完了の「り」「たり」、断定の「なり」、伝聞推定の「なり」、過去の助動詞の「けり」などの助動詞が作られた、ことを記す。後略）
- ・**岩波古語辞典**：あり：【有り・在り】①空間的・時間的に存在する。あるいは他から存在が認識される。生物・無生物がそこに存在する。この世に生きている。その場に居合わせる。時間が経過する。住む。存在がきわだっている、すぐれている。事が起こる・行われる。②陳述を表す。…である。…している。③他の動詞の代行をする。▼アリは語形上、アレ（生）・アラハレ（現）などと関係があり、それらと共に通な ar という語根を持つ。Ar は出生・出現を意味する語根。日本人の物の考え方では物の存在することを、成り出でる、出現するという意味で捉える傾向が古代にさかのぼるほど強い（後略）

#### 4.2 通時的に見たアルの出来用法

古代からの出来・発生のアル（生ル）と存在のアリ（有リ）は、中世以降に「アル」と、互いに同じ形となる。動的な事態の存在の用法は中古より多数見られ、中世にはさらに増え、近代には動的事態の出来の用法へと拡張する。こうしたアルの推移には注目される。

##### 4.2.1 モノの出来を表すアル：

現代語のアルがモノの出来・生成を表す例はほとんど見られず（ただし、現在でも祝詞においては観察される）、「～がアル」は基本的にモノの存在を表す。

- ・故、天先づ成りて地後に定まる。然して後に神聖其の中に生れます。（日本書紀）
- ・筑紫の日向の橋の小戸の阿波岐原に御禊祓ひ給ふ時に生れ坐る祓土の大神等（天津祝詞）

上例を見ると、「成」は神だけでなく国・土地の成立を表し、「生」は神や貴人の誕生を表すと考えられる。中古以降、ナルもアルも誕生の意味用法が減る。(山本・守屋 2020)

なお、探しモノの発見は「アッタ」と言う。これは期待していたモノの発見であるが、日本語では発見を働きかけと捉えるのではなく、主観的な事態把握に基づいて、モノ自らが出現し存在することを現前で認知したかのように、タ形で述べる表現が見られる。(→4.3)

#### 4.2.2 コト（動的事態）の存在を表すアル：将来の予定・過去の実施：場所格は「にて/で」

この用法は中古から現代まで広く観察される。

- ・上に参りたまひて主上殿上に出でさせたまひて御遊びありけり。（紫式部日記第168話）
- ・…この厄神社年の年内としうちは言ふも更なり、将来の先々長く、物怪疫病やまひもろもろ諸の災難ねざわひ有らしめ給はず、…（秋田県須賀神社／神社新報社『祝詞例文集下巻』）
- ・今日、大嘗会有り。（御堂関白日記：寛弘元年条）
- ・明日鶴岡社頭に於て御遊び有るべし。（吾妻鏡：建久元年条）

#### 4.2.3 コト（動的事態）の現前の出来を表すアル：場所格は「で」

現前の出来を捉えた例文は、いわゆる物語文では現れにくく、会話体の物語が書かれるようになってからだと思われる。以下は現代語の例であり、突発的な事態（コト）の発生を捉えた例である。こうした例も他言語でも存在動詞を用いる例が観察される。(4.3参照)

- ・「今、地震があったね」「え、そう？ 気づかなかつた」
- ・「どうしたの？ 何かアッタ？」「いまそこで交通事故がアッタんだ」

### 4.3 通言語的に見たアルの動的事態の存在および出来用法

以下、①動的事態の存在(予定)、②動的事態の存在(記録)、③過去の動的事態の出来／存在(または現前の出来)、④現前の出来、⑤モノの存在の発見、をめぐる各言語の翻訳結果を示す。各例文の訳はインフォーマントチェックを経ておらず正確性の問題があり、複数の翻訳が存在する可能性もあるため、あくまでも参考程度であることをお断りしておく。

日本語:SOV	朝鮮語 SOV	トルコ語:SOV	中国語: SVO	英語 : SVO	ドイツ: SVO
①明日講堂で会議がある。	Naeil gangdang-eseo hoeui-ga itda	Yarın salonda toplantı var.	Míngtiān zài lǐtáng yǒu huìyì	There is a meeting in the hall tomorrow.	Morgen gibt es eine Versammlung im Saal
	itda:存在	var:存在	you : 存在	There is:存在	Es gibt : 存在
②1603年に天下統一があった。	1603-nyeone cheonha tongil-i isseotda.	1603 yılında ülke birliği oldu.	1603 nián you tiānxià tǒngyī	There was the unification of the country in 1603.	Im Jahr 1603 gab es Vereinigung des Landes
	itta : 存在	ol : 出来	you : 存在	There be: 存在	Es gibt : 存在

③駅で事故がアッタ。	Yeogeseo sago-ga isseoseo.	Ístasyonda bir kaza oldu	Chēzhàn fāshēngle rénhēn shìgù,	There was an accident at the station,	Am Bahnhof hat es einen Unfall gegeben,
	itta ; 存在	ol : 出来	发生:出来	There be: 存在	Es gibt:存在
④(大きな音が聞こえて)何がアッタ?	mueos-I isseosseo?	Ne oldu?	Fāshēngle shénme?	What was that /What happened?	Was war (da)?
	Itda;存在	ol : 出来	发生:出来	Be: コピュラ /happen	sein : 存在
⑤(探し物を見つけて)アッタ! 存在	Chajneun mulgeon-i isseosssa!	Íşte burada! Buldum!	Zhǎo dào le! Zài zhèr!	There it is! I found it!	Da ist es! Ich habe es gefunden!
	探していた 物がアッタ! itda:存在	ここだ! 見つけた!	探し出した ／見つけた!  ここにある zai:存在	There it is: ほらそこだ be:存在 私は見つけた!	ほら、そこだ! sein:コピュラ  私は見つけた!

#### 4.4 通言語的に見たアルの動的事態の存在および出来用法の対照からわかること

- 上の表から日本語と朝鮮語では存在動詞が動的事態の出来・存在の表現をカバーする範囲が広く、「光、アレ。光がアッタ」と存在動詞で訳すのは自然な選択だと思われる。
  - 事故や地震などの想定外の、突発的に出来する事態には、トルコ語のように存在動詞ではなく、生成・出来動詞を用いる言語が見られる。
  - 動的事態の出来について、存在動詞と出来動詞の双方を用いる言語も見られる。
- 以上を簡略に整理すると次表のようになる。「光、アレ」を加える「存在動詞／出来動詞」の回答は、必ずその動詞が選ばれることを意味しない。この表は「出来・生成」の表現に出来動詞を好む言語群と、存在動詞の表現を好む言語群がある可能性を示唆する。

	SOV:日本語・朝鮮語	SOV:トルコ語	SVO:英語・ドイツ語 ・中国語
動的事態の存在 ・会議がアル ・事故がアル	存在動詞 存在動詞	存在動詞 出来動詞	存在動詞 存在動詞
動的事態の出来 ・何がアッタ?	存在動詞	出来動詞	出来を表す動詞等
現前のモノの出来 ・発見:アッタ!	存在動詞	ここだ 見つけた	そこだ／ここだ (私は)見つけた
・光,アレ:存在動詞	存在動詞	出来動詞	存在動詞 出来動詞

## 5. 創世記冒頭「光、あれ」において日本語ではなぜ出来を表すナルではなく、存在動詞アルを用いるのか

上記の問い合わせへの答えは既に出ていている。なぜナルを用いないのか、それはナルの自然現象に言寄せた制限的意味、すなわち植物の内発的動因による結実や、人為的成就を自然発生的でな出来として表すことが、神の宣言による「生成・創造」とは異質だからである。また、存在の意味が保証できないことも要因であろう。なぜ他の動詞一「生じる・出来る・出て来る」は用いられないのか。アルにはこうした生成の動的な局面が生き生きと表現できないという弱点がある。だが、これも原文に即して言うと、これらの動詞では出来した事物(光)の存在の保証が不十分であろう。この点、言うまでもなくアルは古来、動的・静的を問わず存在動詞であり、存在が明確に保証される。そして、アルはナルのような時間幅に基づく漸次性・漸次的变化の相を表さず、あたかも点を打つように静的・動的な事物の存在を表す。「アレ」という命令・祈願文は日本の古代語でも見られず、神の言葉としてもはや独立した用法となっている。もっともアルにも問題がある。過去形の「アッタ」は現代語では現前における存在確認・発見の意味とも解釈され、「見つけた」という主観的なイマ・ココに特化した意味を派生しやすい。これは神の命令の帰結の表現に相応しくない。

## 6. おわりに

以上、「存在」と「出来・生成」の両義を備えるヘブライ語 *hyh* による「光、あれ」の表現をめぐり、通言語的に「光、あれ」の文の対照を通じて、日本語の出来動詞「ナル」がなぜこの表現に対応し得ないか、これに対し「アル」がいかに本質的に対応できるか、かつ問題を残すか、そして、他言語では翻訳に際していかに出来・生成動詞で、あるいは存在動詞で対応しているか、その背後にどのような出来・存在の動詞が関わっているかなどの考察を試みた。この大きなテーマに対し、本研究はほんの端緒に触れたに過ぎない。しかし、通時的な語義の確認と通言語的な視野に立ち、動詞「ナル」と「アル」に特化して出来と存在というものを考えることの意義が、少しずつ見えてきたように思われる。

今後の課題は、出来と存在は言語的にいかに記述・表示されるか、その相違はどのように記述できるのかを通時的・通言語的に考察することである。こうした存在と出来の研究、いわばナルとアルの研究は、あらゆる言語を視野に入れて行うべきものであろう。発表者にはあまりにも膨大で手に余るが、非常に魅力的かつ永遠のテーマだと思われる。今後もこの問題とともに、日本語のナルが持つ「こだわり」にも最後まで付き合いたいと思う。

### ◆主要参考文献

- 有賀鐵太郎：有賀鐵太郎博士遺著作集刊行会（1981）『有賀鐵太郎著作集IV』創文社  
池上嘉彦 2025 「『ナル的表現』と事態把握」守屋・池上 2025 に所収 pp317-335  
越後屋朗 2018 「ヘブライ語聖書学における創世記 1 章 1 節-2 章 3 節と動詞 *hyh* (*hyh*) の神学的重要性」第 2 回ナル的表現研究会  
越後屋朗 2025 「創世記 1 章 1 節-2 章 3 節と出エジプト記 3 章における動詞 *h-y-h*」守屋・池上 2025 に所収  
大野晋 1977 「動詞アリの語源について」『上代文学論叢：五味智英先生古希記念』笠間書院 471-

- 影山太郎 2011 「モノ名詞と出来事名詞」 影山太郎編『日英対照 名詞の意味と構文』 大修館書店
- 金水敏 2006 『日本語存在表現の歴史』 ひつじ書房
- 久保田一充 2017 「出来事の発生を表す『～がある』文」『言語研究』 151, 37-62
- 栗林裕 2025 「トルコ語の『ナル的表現』 トルコ語版創世記から」 守屋・池上 2025 に所収
- 小脇光男 2013 『聖書のヘブライ語文法 改訂版』 青山社
- 寺村秀夫 1982 『日本語のシンタクスと意味 I』 くろしお出版
- Thorleif Boman : Das Hebraische Denken im Vergleich mit dem Griechischen 1956 トーレイフ・ボーマン \*1957 植田重雄訳『ヘブライ人とギリシア人の思惟』新教出版社 :
- 橋本功 1995 『聖書の英語』 英潮社
- 三瓶裕文 2025 「ドイツ語の『ナル的表現』」 守屋・池上 2025 に所収
- 宮岸哲也 2025 「シンハラ語版創世記に見る『ナル相当動詞』出来・存在・変化・コピュラとしての意味・機能」 守屋・池上 2025 に所収
- ミルトス・ヘブライ文化研究所編 1990 『ヘブライ語聖書対訳シリーズ1 創世記 I 1-25 章 ミルトス
- 守屋三千代 2025a 「創世記から『出来』と日本語のナルを考える」 守屋・池上 2025 に所収
- 守屋三千代 2025b 「『古事記』と『古事記傳』から見た『ナル』の意味」 守屋・池上 2025 に所収
- 守屋三千代・池上嘉彦編集代表, 角道正佳・栗林裕・岡智之・宮岸哲也編 2005 『「ナル的表現」をめぐる通言語的研究—認知言語学と哲学を視野に入れて』 ひつじ書房
- 守屋三千代 2025c 「ナル的表現における『点』と『線』」 日本認知言語学会ワークショップ (2025/08, 30/JCLA ワークショップ@早稲田大学) 予稿集
- 山下秀雄 1986 『日本のことばとこころ』 講談社
- 山本美紀・守屋三千代 2020 「日本古典文学から見る『ナル表現』」『日本認知言語学会論文集』 第 20 号 pp. 206-218

### ◆主要辞書

- 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎 1990 『岩波古語辞典 補訂版』 岩波書店
- 加藤常賢：1970 『漢字の起源』 角川書店
- 聖書大事典編集委員会編 1989 『聖書大事典』 教文館
- 藤堂明保 1965 『漢字語源辞典』 學光社
- 山口秋穂・秋山守英 2001 『日本語文法大辞典』 明治書院
- Buck, Carl Darling 1949 *A Dictionary of Selected Synonyms in The Principal Indo-European Languages* The University of Chicago Press, Chicago & London  
Cambridge Dictionary, online 版
- Clines, *Dictionary of Classical Hebrew*, Vol. 2, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1995)
- Gesenius, Heinrich Friedrich Wilhelm, 1910 *Hebrew Grammar* ed. Kautzsch & Cowley,  
Koehler & Baumgartner, 1994–2000 *The Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament*, Vol. 1, Leiden: Brill,

Xavier Leon-Dufour[X. レオン・デュフル]編集委員長・Z. イエール翻訳監修 1999『聖書思想事典 新版』三省堂

◆主要引用文献:聖書(刊行年順)

日本聖書協会編 1955『小型聖書(口語)』日本聖書協会・尾山令仁 1975『創世記』羊群社・  
月本昭男 1997『旧約聖書 I 創世記』岩波書店・共同訳聖書実行委員会 1987『聖書新共同訳  
一旧約聖書』日本聖書協会・日本聖書協会翻訳部・あづみ椋 2008『創世(ジェネシス)ー  
光を受けし者たち』日本聖書協会日本聖書協会翻訳部・翻訳委員会訳 2015『文語訳旧約聖  
書 I 立法』岩波書店・関根正雄訳 1956『旧約聖書 創世記』岩波文庫・尾山令仁訳 2004『聖  
書 現代訳』現代訳聖書刊行会・尾山令仁訳 2013『創造主訳聖書【旧新訳聖書】』創造主訳  
聖書刊行会